

西洋古典資料講習会参加報告

著者	濱生 快彦
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	8
ページ	59-60
発行年	2003-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/8130

西洋古典資料講習会参加報告

濱 生 快 彦

平成14年11月12日(火)から15日(金)にかけて標記講習会に参加した。この講習会は一橋大学社会科学古典資料センターが毎年開催しているもので、西洋古典資料について書誌学、資料の修復等を学ぶことの出来る機会として大学図書館職員の中では広く知られている。また、一橋大学社会科学古典資料センターは、カール・メンガー文庫を初めとする貴重な資料を所蔵しているのみならず、国内の大学では珍しく、大学内に資料修復のための工房を設置していることでも有名である。

私自身が、再び洋書の受入業務を担当することになったこともあるが、今年度より新たに収集整理業務のアウトソーシングを開始し、ますます資料を直接取り扱う機会が少なくなったことに加え、アウトソーサーの評価をする上で、逆に資料についての知識の必要性を感じていたため、今回の講習への参加を希望した。

講習会の概要

講習会は、例年とほぼ同様に、(1)書誌学(2)保存・修復(3)古典研究の3つのテーマのもとに、それぞれ2から5つの講義が行われた。(1)書誌学では、いわゆる目録に関する実務に即した内容の講義と、資料の刊行を巡る資料批判を中心とした講義が行われた。(2)保存・修復は、さらに実務に立脚した内容で、図書資料の素材の中心である紙についての講義と製本の専門家の方からの、具体的な資料保存の手法についての講義が行われた。(3)の古典研究は、いわゆる古典派経済学の講義を通じて、古典資料を研究者がいかに活用して研究活動を行っているかを知ることができた。経済については、高校の社会科レベルの知識しかなかったが、いわゆる古典派経済学と聞いて頭に浮かぶ、アダム・スミスを初めとする17世紀前後のイギリス経済学だけでなく、ほぼ同時期のイタリアの経済学者についての講義を膨大な資料をもとに聞くことができて興味深かった。なお、これらの講義の内容は、事前にテキストが送付され、講義の内容を事前に大まかに知り、準備することもでき

る。今後参加される方は、特に、(1)の書誌学については、高野彰著「増補版 洋書の話」(1995年 丸善刊)を参照されると良いのではないかと思います。

さて、講義の内容はそれぞれ充実していて、十分に吸収できたのか不安なほどであるが、ここでは図書館業務に直接に関わり合う(1)書誌学と(2)資料の修復について報告したい。

書誌学

書誌学とは、あえておおざっぱに言えば、資料を目録として記述する記述書誌学と、著作目録や特定の主題にもとづいて資料を調査しリストアップする文献書誌学の双方を指す物と理解しているが、今回の講義では、記述書誌学についての講義と、資料批判についての講義、すなわち、ある資料がいかにして成立したか(今回の講義では東方見聞録の成り立ち)また、研究対象として信用出来るのか、どのように取り扱うべきなのか(デフォーの『ツアー』は文学作品として取り扱うべきか、地誌・旅行記として取り扱うべきか)についての講義が行われた。両者を比較すると、記述書誌学についての講義は、目録の作成、資料の折丁の組み合わせから本の形態を記述する校合式の説明など実務に即したものであるのに対して、東方見聞録や『ツアー』についての講義は、実際の業務に直接は関係しないようにも思える。しかしながら、書誌学のテーマのもとで展開された5つの講義は振り返ってみるとそれぞれ有機的に関連しあっているように思える。たとえば、それは、同一の資料についての異版の重要性についてそれぞれ指摘されていたように感じられるからだ。

一般的に大学図書館では、資料を調達する際に通常は同一の資料は購入しないように努力している。重複調査といって、事前にその資料を所蔵しているか、またはどこの図書館に所蔵があるかを調査することが必須である。ところが、具体的な研究活動では、同一資料の異なる版が重要になることが多い。また、同一の出版年、出版者であっても、古い資料であれば特に、印刷や製本の過程で資料に異同が生

じることがありうる。その異同を精確に把握するためには、記述書誌学の知見が必要であり、目録作成のルールが重要となってくる。適切な資料批判には、精確な書誌記述が不可欠なのである。もっとも、同一の資料を同一の機関が所蔵する必要はない。適切な書誌記述が公開されていれば、研究者は理論上は、必要な資料にアクセスすることが最近の図書館サービスの中では比較的容易だからである。この異版の重要性は、古典資料に限ったことではない。現代においても、単行本が文庫化される際に、著者が加筆訂正することはよくあるし、自身の本棚で探してみたのだが、単行本でも刷りが変わるときに若干の修正が入っている場合もあるようである。

書誌学の講義を通じて、実務的な記述書誌の読み方について学ぶことが出来たことも貴重な経験であるが、私はむしろ異版の重要性に改めて気づかされたことの方が、資料についての新しい視点を手に入れることが出来たように感じて興味深かった。

保存・修復

古典資料は、当然のことながら既に資料が劣化していたり、保存状態のよい資料であっても資料の希少性からその状態を維持するために、保管について細心の注意と専門的な知識が必要となる。今回の講習会では、長く国立文化財研究センターで貴重資料の保存について研究してこられた、昭和女子大学教授の増田勝彦氏と、製本家で一橋大学社会科学古典資料の工房で資料修復に従事しておられる岡本孝治氏の講義を受け、工房の見学も行った。

嘗て、ウィリアム・ブレイズや庄司浅水は「書物の敵」として火、水、熱、塵埃となおざり、無知、紙魚、集書家を挙げていたが、現在では紙そのもの(いわゆる酸性紙の問題)や大気汚染、建築やインクなどに含まれる化学物質等、資料を劣化させる「書物の敵」は増える一方の様に見える。どちらの講義も最新の情報をふんだんに取り込んだ内容で、たとえば、水害にあった場合には急速凍結することが適切であるということや、酸化資料の脱酸化の方法など初めて知ることが多く参考になった。

資料の修復については、現在では可能な限り資料への処置は行わない方がよい、という考え方が支配的であり、仮に壊れてしまった場合でも中性紙の箱に入れて保管することがもっとも安価で安全な保管

方法であることが強調されていた。もっとも、どんな資料でも箱に入れて保管すればよいというものではなく、その資料の価値や稀少度、利用頻度、劣化の原因等を勘案して、製本などの修復も含めて適切な処置を判断しなければならない。また、箱に入れるという保管方法も本来は便宜的な手段であり、資料の劣化を防ぐための継続的な作業計画がなく、単に箱に入れているだけではあまり意味がない。一橋大学社会科学古典資料センターでは、作業の継続性の確保と現物を取り出さなくても資料の状態が分かるように、個々の資料について、その状態をカルテと呼ぶ書式に記録している。岡本孝治氏が言われた、簡単なものでよいので記録を作っておくことが大切だという言葉が印象的だった。一橋大学社会科学古典資料センターでは資料の保存・修復について2001年に「西洋古典資料の組織的保存のために」という資料も刊行されている。本学図書館では、定期的に燻蒸を行っているが、資料の修復についての対策は行っていないため、こうした資料を参考にまず記録を作ってみることを検討した方がよいと思われる。

所感

書誌学と保存・修復を中心に記述してきたが、この二つの課題に共通する点があるとすれば、資料に関することを精確に記述することにつまづくように思う。目録に関しては、目録規則によった適切な書誌記述が必要なことは言うまでもなく、先達たちはそのために多くの努力と、試行錯誤を繰り返してきた。加えて、資料の保管のためにも資料の状態を、カルテとして記録しておくことが重要だ。

目録は利用者のため、カルテは資料の管理、修復を行う図書館職員のためという違いはあるが、図書館の中で、資料を取り扱う部署の業務は、状態を精確に記録することなのだ、という当たり前だが見落としていた点に気づかされたように思う。書誌学の詳細で具体的な知識や、資料修復に必要な接着剤から保管箱の素材に関する情報を得ることが出来たことも貴重な体験であったが、適切な方法で精確に記録するという見落としがちな業務の基本に改めて気づかせてもらったことが、今回の研修の一番の収穫ではないかと考えている。

(はまお やすひこ 学術資料課)